

Title	イギリスにおける精神医療の歴史研究
Sub Title	History of psychiatry and its landscape in Britain
Author	鈴木, 晃仁(Suzuki, Akihito)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2017
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.34, (2017. ), p.73- 99
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：慶應義塾大学医学部設置一〇〇年
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20170000-0073">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20170000-0073</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## イギリスにおける精神医療の歴史研究

鈴木 晃 仁

### イギリスの精神医学史の光景

二〇一七年に、慶應義塾大学の医学部は一九一七年の開設以来一〇〇年を迎えた。開設直後の慶應の医学部で医学史の授業を講じたのが、講師で著名な医学史研究者の富士川游（ふじかわゆう、一八六五—一九四〇）であった。富士川の講義に出席した医学生によると、富士川は日本の医学の歴史、ことにオランダの医学の導入を感激と熱情をこめて語ったという<sup>(1)</sup>。この講義が一つの縁となつて、富士川没後に富士川が手元にとどめておいた古医書一七〇〇点三六〇〇冊あまりは慶應義塾大学と北里記念医学図書館に収められることとなった。この古医書コレクションは、京都大学の富士川文庫とならぶ慶應義塾大学の富士川文庫となり、そのデジタル画像は信濃町メディアセンターがウェブ上で一部を公開しはじめている。また、最先端の医療センターや病院に囲まれた地に

たつ医学図書館の端然としたありさまは、慶應義塾のアート・センターが「信濃町往来」として展示の主題とした。これらのことから、慶應医学部が一〇〇年前に誕生した折の医学史の雰囲気を我々は味わうことができる。

諸外国においては、医学史の興隆がよりはつきりとした形で見られる。ことにイギリスの医学史研究、その中でもとりわけ精神医学の歴史研究は、学問の一つの領域として一九八〇年代から興隆して、二〇〇〇年代以降はイギリスだけでなく世界の中にたしかな位置を占めている。しかし、そのイギリスにおける〈光景〉が実感としてぴんと来ない方もあるのではないかと思う。学問の〈光景〉というのはまだ考えを深めていない粗い概念だが、科学史・科学哲学や社会史や文化史の考えを基盤にして、学問のある領域が現代社会で持つさまざまな意味合いを捉えようとするものである。社会における学問のあり方を考えるとき、学術的な議論の構成や、問題を発見する視角のような点がしばしば注目されるが、そのような学問の中の視点だけを見ていたのでは十分な理解には達しない。それはあたかも、学問は書齋や図書館や資料館で調べられ、学者の頭の中で構成され、学術誌の紙の上で表現されるだけのものであると考えているようなものである。そのような学問の中のことだけでなく、広く社会と呼べるものが、学問とさまざまな関係を取り結ぶ。誰が興味を持つのか、学問の成果はどこで発表されるのか、どのようなメディアが媒介するのか。このような学術の外の要因は、学問の中で主題の選択、その方向付け、議論のトーンなどに大きな影響を与える。学術の成果がそのまま外部に発表されるだけでもないし、外部が学術に直接指示を出す形でもない。両者の相互作用には、領域や主題ごとに違ふ何か、おそらく〈光景〉と呼ぶことができる何かが存在している。この小論の目標は、研究ノートの形式をとって、イギリスの社会において精神医療の歴史研究がどのような光景を作り出しているかを描きだすことで

ある。

ロンドンの中心近くのユーストン駅の正面にそびえる堂々たる建物がウエルカム財団の本部である。その一階にあるのが、医学史の大規模な展示スペースであるウエルカム・コレクションである。<sup>(2)</sup>一年に数回のペースで無料の展示を行い、医学や医学史に関する主題を選び、古い文化財や史料とそして新しい作品を最先端の手法を用いて展示する場である。その中でも人気がある主題は精神医療の歴史である。二〇一六年の秋には精神病院の歴史についての展示が、二〇一六年の春には精神と意識の問題についての展示が行われている。二〇一三年には、日本の精神病院の患者たちの芸術作品を三〇〇点ほど集めたSouzon「創造／想像」という展示が行われた。この建物の一階では、医学史に関連する書籍や絵葉書などのグッズとともに、展覧会の図録や書籍も販売されている。お洒落なカフェテリアもついでおり、一般の人々の訪問にあわせた空間設計がされている。おなじ建物の三階と四階には、ウエルカム・ライブラリーがある。<sup>(3)</sup>ここは一階の展示場と異なる機能を持っている。一階の展示場が多くの人々に訴える展示の空間であるとすれば、三階と四階は学者や学生が医学史を研究し学ぶための学術的な空間である。この図書館は公共図書館であり、建物の三階の受付でパスポートなどの身分証を提示すれば、無料で会員証を作ってもらい、ライブラリーが所蔵する資料を見ることが出来る。医学史全般に関する古い書籍、史料、学術書、論文などが所蔵され、それを手にとり勉強する学生や大学院生や研究者などが数多くいる。精神医学の史料や学術書も多い。

ウエルカム財団は、一階の展示、三階・四階の学術に加えて、さらに丁寧な情報の公開も行っている。ウエルカム・コレクションもウエルカム・ライブラリーも、所藏品や資料のかなりの部分をネット上で公開している。その多くは、丁寧な解説を付けたデジタル画像や文書である。たとえば、クエイカー教徒たちが設立した

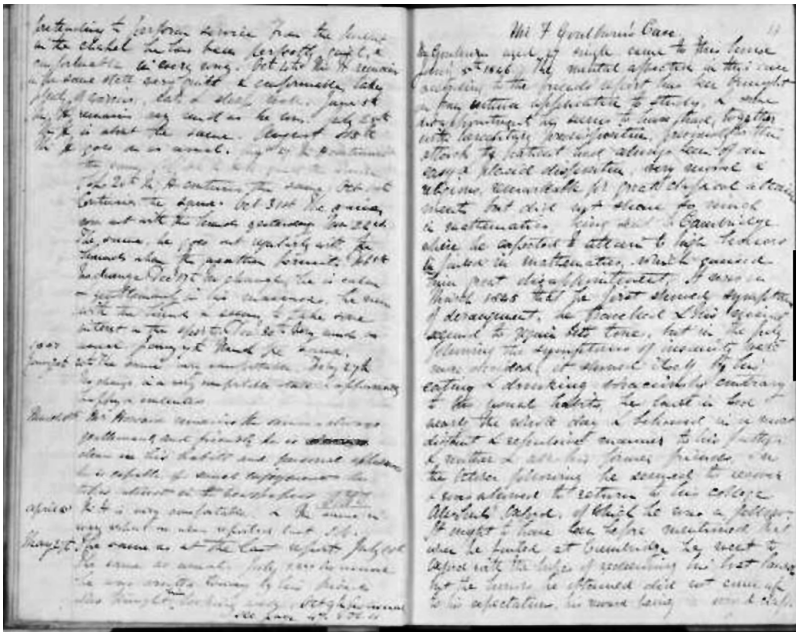


図1 タイスハースト・ハウスの症例誌。Wellcome Library, Ticehurst House Hospital Papers, Case records 1846-1858. MS6245/6361/6361/6361.

<https://wellcomelibrary.org/item/b18932794> (2017年12月7日閲覧) タイスハースト病院の歴史については、Charlotte MacKenzie, *Psychiatry for the Rich: A History of Ticehurst Private Asylum, 1792-1917* (London: Routledge, 1992).

改革派の精神病院の代表であるヨーク・リトリート (York Retreat) の患者が描いた絵画や、一九世紀に富裕な患者たちを収容した精神病院であるタイスハースト・ハウス (Ticehurst House) の患者の診療録などがデジタル化されている「図1」。そのため、コレクションやライブラリーが所蔵するマテリアルに関して、世界中どこからでもその画像と内容を読むことができることになる。(4) すなわち、ウエルカム・コレクションやウエルカム・ライブラリーの展示、学術、公開のいづれをとつても、その規模、深さ、洗練は素晴らしい。学術の水準、展示の質と集客力、国際的な発信力におい



図2 ベスレム美術博物館のホールに位置する2つの彫像。左が「メランコリア」、右が「狂乱するマニア」。デンマーク出身でロンドンに移住した彫刻家のカイウス・ガブリエル・シバー（Caius Gabriel Cibber, 1633-1700）が1680年に製作し、ロンドンの精神病院であるベスレム病院の正門を飾った。

て、世界の他の地域の医学史と較べても圧倒的な強さを持っている。

社会への展示、医学史の学術研究、そして世界への情報の公開が一つになった立体的な展開は、ロンドンのウエルカム・コレクションやウエルカム・ライブラリーだけに見られる現象ではなく、イギリスのあちこちで見られることである。<sup>(5)</sup>例えば、ロンドンの南の郊外には、もともとは二三世紀以来の歴史があるベスレム病院の博物館 *Bethlem Museum of the Mind* がある。<sup>(6)</sup>この病院の患者が残した芸術作品は高く評価され、病院がその収集に力を入れていたことを生かして、現在は患者が在院中などに製作した作品などを中心にして、芸術関連のコレクションを展示するスペースを持つている。そのスペースの入り口には、一七世紀末の彫刻家が制作した精神病の二つの型である「マニア」と「メランコリア」の彫像が階段の両脇に飾られて、風格を持った展示の環境が整えられている【図2】。

これは病院を基盤にしたスペースであるが、大学などの学術機関も、医学史や精神医学史に関する展示や作品の上演などを頻繁に行っている。活発な拠点の一つがウォリック大学の医学史学科

であり、演劇上演や展示などを数多く行っているありさまが、ネット上で詳報されている。その中には、精神疾患で入院した人々の人生の歴史研究から脚本を書き、それを上演した記録なども含めて、非常に多くの精神医学史の主題がある。<sup>(7)</sup> また、医学といったときには、そこに看護も含まれており、一九世紀にフロレンス・ナイチンゲールが最初の看護学校を開いたセント・トマス病院には、非常に充実した看護の歴史に関する研究と展示と発信が行われており、ウェブサイトも充実している。<sup>(8)</sup>

このように、イギリスにおける医学史や精神医学史は、イギリスの社会の中でさまざまな意味で特有の（光景）を構成している。筆者も、日本だけでなくヨーロッパと北米の各国で医学史の国際学会に出るたびに、イギリスにおける医学史をめぐる光景の違いを強く感じてきた。<sup>(9)</sup> イギリスでの医学史は、学術研究として実証的で鮮明な枠組みを持った研究の対象になっていただけでなく、その成果がわかりやすく生き生きとした形で人々に発信されており、そのためのスペースや制度が整えられている。これは学問の中の議論の内容や水準の違いだけでなく、その学問が社会でどのような機能を果たしているのかという問題を含むものである。学術研究が、どのような社会的な目的を持っているのか。誰に向かって、どのように、どんな媒体で語られているのか。この小論は、そのような問題に即して、イギリスの医学史と精神医学史の研究の発展について考えを述べてみたい。第二節では医学史一般に関して、第三節では精神医学史に特化して、第四節では歴史史料とアウトリーチに関して、イギリスの医学史が異なった光景を作り出すにいたった過程を論じたい。

## 医療史研究の「新興国」

イギリスの医学史研究の水準は、現在では世界の中で群を抜いて高い。しかし、五〇年ほど前には、イギリスは医学史研究が盛んな国ではなかった。一九七〇年代にイギリスが医学史を発展させようとしたとき、研究の「新興国」として始めたと言ってもよい。<sup>(10)</sup>

一九六〇年代の世界で医学史の研究の蓄積があったのは、ドイツの医学史の影響を受けて発展したアメリカであった。<sup>(11)</sup>二〇世紀中葉の世界で著名であり指導的な立場にあった医学史の研究者は、第二次大戦の前にドイツ語圏からアメリカに移住して拠点を築いた研究者たちであった。ヘンリー・ジゲリスト (Henry Sigerist, 1891-1957)、『アーウィン・アッカークネヒト (Erwin Ackerknecht, 1906-1988)』、オウセイ・テムキン (Owsei Tenkin, 1902-2002) などが、ここで念頭に置いているドイツ語圏からアメリカに移住して活躍した医学史研究者たちである。<sup>(12)</sup>彼らの著作のうち翻訳されたものを挙げると、ジゲリストの『文明と病気』、アッカークネヒトの『パリ病院』、テムキンの『てんかんの歴史』などの数多くの名著がある。<sup>(13)</sup>彼らの医学史の大きな特徴は、学問の制度の中での位置づけである。この三人はいずれも医学部を卒業した医師であり、医学部に設置された医学史の講座の教授として活躍した。それ以前の医学史が持っていた余技や趣味としての古い医学史研究から離脱し、医学史の専門職が行う当時としては新しい研究の姿をここに見ることができ<sup>(14)</sup>る。

それに対して、一九七〇年代からのイギリスにおいては、それとはさらに異なったモデルの医学史研究が現れた。制度的には、〈医師による、医学部の中での医学史の専門家〉というテムキンらの古いモデルとは異なる、〈人文社会科学系の歴史学を軸にした医学史研究〉という形をとり、内容的には、患者と社会と倫理の問題と密接に連携した方法論が主軸となった。このように形成されたものを〈新しい医学史〉と筆者は呼んでいる。



一九七〇年代の後半から、ロンドン大学のユニヴァーシティ・コレッジ・ロンドン（UCL）、オクスフォード大学、ケンブリッジ大学、マンチェスター大学、グラスゴウ大学に、医学史研究の拠点が作られた。その源は、イギリスの大規模な製薬会社を背景に持つウエルカム財団が持つ大きな資金の投入であった。これらの拠点は、ロンドンの場合は既存の研究所であるウエルカム医学史研究所とUCLの連携という形をとり、他の大学では医学史の分科という形をとった。<sup>(15)</sup> いずれの組織も複数の教員やポスト・ドクトラルの研究員たちを擁し、学部と大学院の教育を展開した。いずれの拠点も急速に国際的な吸引力を持つ研究・教育組織となり、ヨーロッパ、南北アメリカ、オセアニア、アジア諸国、アフリカなどから教員、研究者、大学院生が参加する機関となった。一九九〇年代にはこの仕組みが変更されて、医学史の分科という形だけではなく、他の大学の歴史学部などにも似たような組織が作られて、複数の医学史研究者が置かれるという形が展開した。新たに加わったのは、ロンドン大学のキングズ・コレッジ、同じロンドン大学のクイーン・メアリー・コレッジ、ウォリック大学、ヨーク大学、バークミンガム大学、エディンバラ大学などが、優れた教員とポストドクが独自の方向性を持つ組織を展開していった。<sup>(16)</sup> クイーン・メアリーは精神医療の歴史、ウォリック大学は社会史、ヨーク大学は国際医療に特徴がある。これらの医学史のセンターで学んだ大学院生たちが世界各地に散り、その地で医学史を教えるという形で世界に拡散している。

医学史はもちろん学際的な領域であり、医学と歴史学の双方がかかわる学問である。この二つの学問領域のバランスをどのように設計するかが、医学史の性格を大きく変える。ジゲリストやテムキンらの古い医学史が、医学と医学部の色が濃かったのに対し、イギリスの新しい医学史では人文社会科学の要因がはっきりと強くなった。この人文社会科学の強調は、医学史を研究し教育する学者たちの経歴においても、その学者たちが

所属する学部や学科という制度においても、分析と議論の方法論や手法という側面においても、はつきり見取することができる。

まず経歴と制度についていうと、新しい医学史の研究と教育における中心的な役割を果たしたのは、人文社会科学出身の研究者たちであった。UCLの教授で新しい医学史の象徴であったロイ・ポーター (Roy Porter, 1946-2002) 、オクスフォード大での医学史研究を牽引したチャールズ・ウェブスター (Charles Webster) 、そしてオクスフォード大に歴史人口学に基づく新しい医学史を確立したりチャード・スミス (Richard Smith) は、ポーターの社会史、ウェブスターの科学思想史、スミスの経済史と、それぞれ領域は違うが、いずれも歴史学を中心とする人文社会科学を学び、そこから新しい医学史の問題を組み立てた学者たちである。そして彼らに教えられた学者たちも、その多くが人文社会科学の出身であり、人文社会科学系の学部で教鞭を取るようになっていく。

新しい医学史にも、もちろん医学部を出て医師の資格を持つ研究者もいた。ロンドンのウエルカム医学史研究所の黄金時代の所長で、数多くの医学史研究者に現在でも敬愛されているW・F・バイナム (W. F. Bynum) や、同じくウエルカム研究所で教授を務めたクリストファー・ローレンス (Christopher Lawrence) は医師であり、彼らの記述には歴史学の学識と並んで医師としての洞察も生き生きと躍動していた。しかし、彼らも医学を習得したのち、ケンブリッジやエディンバラの歴史学部や科学史学科の大学院で学んでいることを思い出さねばならない。

新しい医学史は、その視点においても、人文社会科学系の視点を優先した。一九七〇年代は、ジェンダー、社会史、歴史人口学、生命倫理学など、医学史と直結する人文社会科学の視点が大きな注目を集めた時期であ

ることを考えると、方法論や分析の視角においても、新しい医学史が人文社会科学に重心を掛けていたことも頷ける。そのような視点からの医学や医療の分析が陸続と現れて医学史の中核を形成していった。

その一つの表現として、新しい医学史の教科書が、それまでの医学史のような体裁をとらなくなったことをあげよう。これまでは、大卒の上位系列として古代から現代までを時代順に配列し、その中で下位系列として解剖学、生理学、外科などといった診療科別の構成を利用するという方法で標準的な教科書が書かれてきた。日本で著名な著作でいうと、富士川游の『日本医学史』や川喜田愛郎『近代医学の史的基盤』がこの時代順・診療科別の形式をとっている<sup>(17)</sup>。しかし、新しい医学史の教科書は、このような形式をとらないことが多い。重要な教科書やレファレンスでは、古代から現代までの時代順の章、世界の各地域や世界性の地域ごとの章、そして子供、女性、高齢者、死、性、環境、階級、人種、精神医療、生命倫理などの重要な主題ごとにまとめた章が組み合わされた構成になっている。新しい医学史のこのような構成にはさまざまな要因があり、時代順という原則と古い医学史の枠組みを尊重すると同時に、新たに国際性とグローバル性を増したことに対応する各地の医学の問題の提示、そして切り込む主題ごとのまとめという在り方が反映されている。かつての、医者が医学生と医者に向かって医学の歴史を語るというモードに較べると、はるかに複雑であり、国際性と人文社会科学性が重んじられた構成になっている。

## 精神医学史の研究と患者の歴史

イギリスの医学史がこのように急速に変容し伸張していく中で、特に目覚ましい発展をしたのが、精神医

学・精神医療の歴史の領域であった。一九七〇年代から八〇年代にかけてのイギリス、アメリカ、ヨーロッパ諸国においては、精神医療の歴史を見直す条件がそろっていた。各国において、一九六〇年代と七〇年代の劇的な改革を通じて、精神病院を中軸とするシステムは否定され、新たな地域精神医療のシステムの構築が始まっていた。<sup>(19)</sup> 反精神医学の考え方や、『狂気の歴史』のミシェル・フーコーの考え方も大きな影響を与えていた。<sup>(20)</sup> 人文社会科学においては、生命倫理の視点、社会史の視点、ジェンダー論の視点、文学における疾病の物語の視点、絵画や版画などの視覚表象における他者の問題など、精神医療の歴史と深い関係を持つ数多くの新しい方法論が登場していた。

精神医療の歴史は、一九八〇年代の大学や大学院で積極的に教えられ、多くの博士論文の主題となった。歴史や医学史の一流の学術誌に、精神医療の歴史に関する論文が数多く書かれた。<sup>(21)</sup> 精神医療の歴史の専門の学術誌 *History of Psychiatry* も刊行されている。優れた学術書が続々と出版され、イギリスの精神医療の歴史についての優れた一般向け書物が次々と書店に並んだ。学術賞を受賞したものもある。現在のところ精神医療の歴史に関する最新のレファレンスは、二〇一七年に出版された『ラウトレッジ 狂気と精神保健の歴史』である。<sup>(22)</sup> 二一章構成で四〇〇ページの大著であり、広範な地域と古代から現代までの時代をカバーしている。そこに見られる歴史学、医学史、歴史社会学などの学問の領域におけるアプローチは、さきほど医学史に関して述べたように、それぞれの地域や主題における方法論などの違いを反映して、きわめて多様な形を取っている。

この状況の中でイギリスの精神医療の歴史研究はいくつかの異なった方向に発展した。まずは、精神科医たち自身が趣味や余暇の時間に行う比較的古いタイプの精神医療研究があった。趣味や余暇という聞こえは悪

いが、この中には非常に水準が高い研究者が存在するというのも事実である。イギリスでは、いずれも精神科医であり、母親と息子でもあるアイダ・マカルピン (Ida Macalpine, 1899-1974) とリチャード・ハンター (Richard Hunter, 1923-1981) が、精神医療の歴史に関する数々の著作を残し、彼らの著作の水準は非常に高かった。<sup>(23)</sup> 一六世紀から一九世紀中葉までのイギリスの精神疾患と精神医療に関するさまざまな記録を、医学書、司法文書、行政文書などから抜粋した大著はひとつのひな形を提供した。また、イギリス国王のジョージ三世の精神疾患について、政治家の日記や書簡などから国王の精神疾患に関する素晴らしいモノグラフを仕上げた。これは原著は一九六九年であるが、新しい医学史の波に乗って、劇作家のアラン・ベネットが一九九一年に舞台化して上演し、一九九四年には映画として上映された。

このような精神科医による歴史学の発展を一つの背景にして、ケンブリッジ大学の精神医学の教授であったハーマン・ベリオス (German Berrios) は、精神疾患に関する確な理解、精神医学の理論や実践への通暁、英語とスペイン語はもちろん、ドイツ語とフランス語も完璧にマスターした傑出した語学力、さらにはヨーロッパと南北アメリカ (ベリオスはペルーの出身である) にまたがって広く築かれた人脈などを利用して、医師による精神医療の歴史研究を大きく発展させた。<sup>(24)</sup> ベリオスはロイ・ポーターをはじめとする人文社会系の研究者とも緊密に協力し、前出の *History of Psychiatry* 誌を創設して、それを現在の成功に導いた。イギリス精神医学雑誌 *British Journal of Psychiatry* の編集長であったヒュー・フリーマン (Hugh Freeman, 1929-2011) は、その晩年に精神医学の歴史研究の結節として大きな貢献をして、ベリオスと協力してイギリス精神医療の百五十年を回顧した論集を出している。<sup>(25)</sup>

これらが精神医学の側からの動きだとすると、反精神医学やミシエル・フォーコー、そしてさまざまな人文社

会科学の理論の影響を受けて、精神医療や精神病院の仕組みや権力を批判的に研究する力が台頭して確立していた。この方向性を取った数々の学者がいるが、とりわけ重要であったのは、アメリカにベースを持つ歴史社会学者のアンドリュー・スカル (Andrew Scull) であった。スカルは一九七九年に *Museums of Madness* を刊行して精神医療の医師批判を鮮明にして、編著の形でそのような態度を表明した一連の著作をあらわした。<sup>(26)</sup> スカルの考えは、精神科医たちからは感情的な対立の色が濃い激しい批判を受け、のちに人文系の学者からは新しい史料の分析に基づいた実証的な批判を数多く受けた。しかし、スカルはそれらに批判に応えながら、その後も数多くの実証的で水準が高い精神医療職を批判する著作を発表して、業界の実力者としての地位を確かなものにしていった。<sup>(27)</sup>

しかし、イギリスの精神医療の歴史研究の学術的な定着、学際的な方法の開拓、そして社会的な発展について、他の学者を圧倒する貢献をしたのは、ウエルカム医学史研究所のロイ・ポーターであった。ポーターを軸にして、さまざまな学術的な方向からのアプローチが、精神医学史や精神医療史を研究する一つの知的空間に寄りあわされた。そして医学史、精神医学、歴史、社会史、経済史、文学、演劇、美術などの各領域の研究者が、精神医療の歴史を研究する枠組みが作り上げられた。この時期のポーターは、単著の著作や学際的な編著の刊行に、驚異的な大車輪の活躍を見せていた。一九八五年から八八年にかけて、バイナムらとともに共編した狂気の歴史の三巻本、一八世紀精神医療の新たな位置づけを示したポーターの著作は、新時代が切り開かれたことを予言するものであった。<sup>(28)</sup> 一九九三年に編著で刊行されたヒステリーの歴史は、古典学、美術史、文学史、女性学などの多様な学問を軸に構成される新たな精神医学史の完成された姿を見せつけた。<sup>(29)</sup> 自分の弟子や世界各地の医学史研究者に声を掛けて、マーク・ミケーリ (Mark Micale) やデイヴィッド・ライト (David

Wright) と共編した国際的な精神医療史も、新しいフォーマットを開拓した編著であった。<sup>(30)</sup>

このような多様な新しい形式を次々と発想して実現したのはもちろん大きな功績である。しかし、ポーターが残したそれ以上に大きな貢献は、このような多様さを持つようになった精神医学史に、一つのまとまりと連関を与えるキーワードを持ち込んだことである。それが〈患者の歴史〉の視点の導入であった。<sup>(31)</sup>

患者の歴史という概念は、新しい医学史の重要な核となった。ポーターは、その概念の基盤となった重要な論文や書物・編著を刊行したが、実際にそれを発展させていったのは、それにインスパイアされた歴史学者たちであった。<sup>(32)</sup> 医療はもともと医療者と患者のペアから構成されている。ところが、これまでの古い医学史は、ペアの片側である医療者だけを見てきた歴史である。そのペアの両者の歴史を扱うものとして新しい発展の方向を簡単に定義することができる。そして、新しい医学や精神医学の歴史が、概念的なまとまりと連関を持つためには、そこに患者という大きなアクターが導入されることが必要であった。

患者の歴史という視点を導入することで、当時はじめられてきた数々の新しい人文社会科学の視点と精神医学史が融合されて関係を持つ有機体になることが可能になった。医療をサービスの提供と捉えようと、患者や患者の家族はそのサービスを購入する消費者としての性格を持って経済史との連携が可能になった。公共の福祉としての精神病院への収容サービスに着目すると、福祉と行政の歴史の分析と組み合わせることが可能になった。精神医療の治安と隔離収容的な面に着目すると、警察の治安維持における犯罪者とのオーバーラップを問うことができるようになった。患者の虐待は倫理や哲学との関連を作り出し、患者の記述や物語は文学研究と結ばれ、患者が女性であればフェミニズムの視点、患者が異なった人種であれば人種理論とのつながりができるようにになった。このような患者の歴史の考え方は、文学の歴史、他者の歴史、記録の歴史などの、患者を位

置づける他の考え方と融合しながら現代まで発展している<sup>(33)</sup>。

この過程で、ポーターたちによって、患者の歴史という概念はかなりの幅と広さを許容するものとして考えられていた。当時のイギリスにおいて、患者の歴史という言い方をすると、それに対立する医者<sup>(34)</sup>の視点や、患者が置かれる精神医療の制度を設計した国家や自治体に対して、総じて敵対的な立場をとるものと考えられていた。個々の指摘は正しいのだが、全体として患者の利益を原理主義的に主張する立場をさすと考えられる傾向があった。ポーターをはじめとするイギリスの新しい医学史が考えた患者の歴史の発想は、そのような原理主義的な考えとは異なっていた。セミナーなどでポーターたちがしばしば使っていた言葉は、イギリス国教会で「広教会主義」を意味する *Broad church* や *latitudinarianism* であった。これは、患者の歴史が新しい医学史の中核になったが、それは間口が広く、他の視点と結びついて発展する余裕があるものとして構想されていたことを示す。軸とする新しい医学史を広く捉えようという立場であり、患者の歴史という考え方も原理主義的・敵対的にだけ用いるのではなく、それも含めたさまざまな意味で使っていこうという考えであった。これは北米の医学史研究で起きがち<sup>(35)</sup>な、学術的な論争が「文化戦争」*Culture War* の様相を呈する傾向からイギリスの考え方を区別するものであった。北米の医学医療をめぐる議論では、原理の攻撃的な主張とさらに攻撃的な罵倒の応酬になりがちであり、この文化戦争は北米の医学史にも影響を与えている。イギリスで考えられた広教会主義的な間口が広い患者の歴史の導入は、新しい医学史にゆるやかだが確実なまとまりと連関を与え、学際的な多様化を歓迎しただけではなく、新しい方向への発展の後押しとなった。デイヴィッド・ライト、ジョゼフ・メリング、そして筆者自身らが推進した社会史や歴史人口学の視点を<sup>(36)</sup>用いて世帯のケアの能力や問題を処理するパターンから出発する精神医療史の開発は、その一例であると考えている。



## 歴史史料からアウトリーチへ

患者の歴史を組み立てるためには、これまでの古い医学史が集めていた医者が書いた書物や手紙などは異なる、新しいタイプの史料が必要になる。文学の世界では患者の文学者が書いた書物や手稿、美術の世界では患者が描いた作品、あるいは患者を描いた作品などがコアの史料となり、それらは、すでにある程度集められていた。もちろん、精神疾患の患者が書いたものが偶然発見される可能性は存在するが、それは偶発的な事象であり、歴史学はそのような偶然に左右される史料をもとにして発展しない。この問題は、精神科医がつけていた医療記録、行政機関が作成していた患者に関する行政記録から、患者個人に関する情報を抜き出すことで解決された。これらの史料は、その所在すらわかれば組織的に生産され保存されるものであり、この患者と医師が作り出す医療に関する情報、患者と行政が作り出す情報を確保してアーカイブズとしたことが、イギリスの医学史の成功の決め手となり、またのちの社会的な発展を確保することになった。

新しい精神医療史が離陸してすぐに大きなインパクトを与えたのが、ケンブリッジ大学出版局から刊行されたアメリカの歴史学者のマイケル・マクドナルド (Michael MacDonald) による *Mystical Bedlam* <sup>(37)</sup> であった。この書物のもとになったのは、一六世紀から一七世紀にかけてイギリスの地方の村落の牧師であったリチャード・ネイピア (Richard Napier, 1559-1634) の記録である。ネイピアは占星術を用いた医療を行って多くの精神疾患の患者を引き付けた。それぞれの患者を診療したときの記録が、患者一人につき一件ずつの診療録になって、それが合計で二〇〇〇件ほど存在している。この史料分析を用いてマクドナルドが描いた初期近代の

精神医療の社会史は、それまでの著作とまったく異なったものであった。マクドナルドは、その後も自殺者に関する行政記録を中心に、患者を軸においた記述を社会と文化の中に埋め込む社会史の範例を示してきた。彼に倣った著作も生み出されてきた。<sup>(38)</sup> ネイピアの資料は、画像データ化されてケンブリッジ大学の研究者たちが管理してウェブサイト上にアップロードされている。<sup>(39)</sup>

マクドナルドが用いたネイピアの診療録は、初期近代の膨大な診療録という比較的レアなタイプの記録であったが、一九八五年に社会経済史家のアン・デイグビーが刊行した *Madness, Morality and Medicine* は、精神病院の記録という標準的に作られた記録を用いていた。後の精神医学史の発展の主軸をなすことになる史料的な展望は、デイグビーの著作が確立した。<sup>(40)</sup> デイグビーの書物は、一八世紀末から二〇世紀初頭における私立精神病院であるヨーク・リトリートの一二〇年にわたる多様な記録にアクセスして描かれた著作である。ヨーク・リトリートは一八世紀末の精神医療の大改革時代に、理想的な精神病院としてのイメージを提供した重要な精神病院である。デイグビーはそのポジティブな像を大体において認めたので、反精神医学やフーコー派には高く評価されなかったが、非常に充実した史料群を用いて、実に重層的なイメージを描き出した。個々の患者に関する詳細な情報を記した記録があり、入院までの疾病の様子が記した資料があり、入院期間中の疾病の進行、治療の効果と患者の反応、患者や訪問した家族などの様子が描き込まれている書簡や書類があった。一方で、病院の経営方針に関しては、政治・行政・方針の上の決断は、理事会の議事録が理事の実名入りで残されて、その理事はしばしば地域の有力者であるから同時代の政治的な活動などに関連付けることができた。病院の経営上の記録には、病院の資産を運営した収入、患者が支払った治療費や入院料などの収入、宗教団体などからの寄附の記録があり、医師や看護人に払った給与、設備投資や備品投資、病院建築や広大な敷地の整備

に関する費用などを詳細に再構成することができる。

マクドナルドやディグビーの著作を作り上げているデータの種類とその処理の仕方は、後の精神医学史の範型であり、その後、無数に刊行された単行本、博士論文、学術論文にとつての範例となるものであった。一九世紀以降に多く建設された公立の精神病院では、同じような患者の記録、診療の記録、経営に関する記録が標準的に作られていた。新しい治療法が導入されると、詳細な医療記録が残された。疾病だけでなく、階級やジェンダーの視点から患者を位置付けることができる史料がいやになるくらい存在した。医療の位置づけについて、医学史だけでなく政治史や経済史の枠組みの中で本格的な議論を展開するための資料が存在した。興味深い患者や悲劇的な人生を歩んだ患者に関する記録も十分存在した。自分自身で記録を残す患者も多かった。他のタイプの記録と関連付ければ、さらに多様な方法を用いることもできた。

これらの資料は、通常は地方の公文書館に整理されて残されていた。イギリスの図書館や文書館はもともと優れたものであったし、ヨーロッパや北米から来た学者たちも高く称賛していた。また、これらの資料の利用を通じて、ウェルカム財団をはじめとする機関から資金を得たり、地方自治体などが力を入れる場合も存在した。そうすると、歴史学者の世界だけでなく、文書館もこの動きに積極的に参加するようになる。同じことが、博物館や病院などの古文書などについても成立した。歴史を持つ古い病院や、その病院が持つ古い史料や文化財が学者たちによって利用され、その価値が再発見されると、博物館と病院などが医学史研究と協働し、学術と結びついた文化活動にかかわるようになった。これが、学術の側からみると「アウトリーチ」と言われる現象である。

アウトリーチというのは、学術の側からみると、学会や大学での授業のように、学者同士や学生に向かって

話すのではなく、社会にむかってある特定の場を設定してメッセージを発する仕組みである。もちろん、これは学者自身が行ってもいいのだが、学者の本分はもとと学問や教育であって、巧みで感動を残すメッセージを残すことは、重要なこととはいえ二次的なものである。そうすると、アウトリーチを担う別の職業につく人々と学術の関係が生まれ、そのような仕事を本分とする人々と協力して行うことになる。たとえば、精神病院の患者の生涯を脚本にして劇団と協力して上演することや、音楽と関係を持つ主題に関して狂気を扱ったオペラなどを上演することなどが、学術と芸能を結び付けたアウトリーチになる。<sup>(4)</sup>

## おわりに

イギリスの医学史と精神医学史の研究の急速な伸張を検討した。それまで医学史研究については新興国であった国が、巨大な財源に支えられて新たな研究のモデルを打ち立てた。ここでは、医学と人文社会系の二つの学問のバランスについて、制度的にも方法的にも後者に比重が移された。そのために、新たな中心として、間口が広い形で〈患者〉を据えると同時に、患者に光を当てる史料を組織的に確保して分析方法を開発した。さらに、そこからのメッセージをアウトリーチとして発信するメカニズムを作り上げていることを紹介した。二つだけ、メッセージを付け加えたい。一つは、患者の史料とアウトリーチの現象の興味深さである。精神医療は患者を隔離監禁して「隠す」という側面を持つと同時に、ある意味で「街に出る」こともずっと望んでいた。一九世紀初頭に公的に規制された精神病院が確立したときに、不適な状態で監禁されていた患者の事例の批判が世論やマスメディアを埋め尽くしたときも、精神医療は街に出たと言えるだろう。また、二〇世紀中

葉にイギリスのR・D・レインやイタリアのフランコ・バザーリアたちのいわゆる「反精神医学」が行ったことは、管理的で生活の質が低い巨大な長期隔離収容型の精神病院に閉じ込められていた患者を再び社会に出すことであった。現在の精神医学史のアウトリーチは、それらとは異なった次元ではあるが、〈患者を世に出すこと〉を広い意味で行っている。アウトリーチによって、近い過去の実際の患者の姿が、歴史学者たちのプロフェッショナルな研究に基づいて、人々に知られるようになっていく。その意味で、近現代の精神医学と反精神医学の双方が、ここに続いているという印象を持つ。

もう一つが、日本の医学史と精神医学史との関係の問題である。イギリスの精神医療の歴史研究の進展は、目と心を奪われるようなできごとであった。学問的な深化と多様化を進行させ、社会的な発信を著しく充実したものにしたい。日本でも同じように精神医療の歴史を研究しアウトリーチしようと考えている学者にとって、イギリスから学ぶことは非常に多い。医学史についても同じようなことが言えるだろう。そして、この側面において、日本の若手医学史研究者を見ると、日本の医学史の将来は明るい。日本では、廣川和花、高林陽展、佐藤雅浩、中尾麻伊香、後藤基行、中村江里、外国ではChristopher Harding, Reut Harari, Evan Young, Ryan Moran, Shi Lin Lohなどの実力がある研究者たちが、新しい医学史に向かっていく。東京の松沢病院には「日本精神神経学資料館」も設立されて、九州大学の精神科でも史料の保存と利用に向けた動きが始まっている。このような動きが広がると、これからの日本の医学史と精神医療史の研究が大きく発展して、新しい光景を作り出すことができるだろう。

注

- (1) 富士川英郎『富士川遊』（東京：小澤書店、一九九〇）。
- (2) ウェルカム・コレクションのウェブサイトは以下の通り。二〇一七年二月七日アクセス。 <https://wellcomecollection.org/>
- (3) ウェルカム図書館は別のサイトを持っている。二〇一七年二月七日アクセス。 <https://wellcomehistory.org/>
- (4) ただ、世界中の医学と医療が対象になるので、日本や中国の史料については、解説に学問的な不備がある場合もままあり、正しい情報への訂正は迅速ではないようである。
- (5) イギリスを中心とする医学史に関連するウェブサイトの一覧については、立教大学文学部の准教授の高林陽展が中心になって作成したものが充実している。これは、筆者が研究代表を務める学術振興会の「先導的人社」の資金援助を受けて開設されたポータルサイト「医学史と社会の対話」の一部である。サイトは以下の通り（二〇一七年二月七日アクセス） <http://gakushitokyakai.com/>
- (6) *Behlem Museum of the Mind*のサイトは以下の通りである。二〇一七年二月七日アクセス。 <http://museumofthemind.org.uk/>
- (7) ウォリック大学の医学史のアウトリーチの紹介は以下のサイト。二〇一七年二月七日アクセス。 <https://warwick.ac.uk/fac/arts/history/chm/outreach/>
- (8) ナイティンゲールの博物館 *Nightingale Museum* は以下の通り。二〇一七年二月七日アクセス。 <http://www.florence-nightingale.co.uk/?v=24d22e03ab2>
- (9) イギリスの医学史の発展ともっとも近いと同時に鮮明な違いを持っているのはアメリカの医学史である。アメリカの科学史と科学哲学においては、ロレーヌ・ダストン (Lorraine Daston) やピーター・ギャリソン (Peter Galison) などの著作が始めた歴史的認識論 (historical epidemiology) が大きな影響力を持った。医学史の世界では、ハーバー

ド大学の科学史のキャサリン・パーク (Katharine Park) や、ミュンヘンのマックス・プランク研究所を経てジョン・ホプキンス大学の医学史を教えるジアナ・ポマータ (Gianna Pomata) などが、歴史認識論の立場を取って優れた著作を発表してきた。こちらは、科学哲学や科学思想史と深く結びついた科学史であり、ミシェル・フーコーやトマス・クーンが知識とその対象の形成について展開した著作から大きな影響を受けている。イギリスの医学史と重なる部分も大きい。敢えて対比させるとしたら、アメリカの科学史・医学史においては、科学者や医師が議論の中心にあり、科学者たちがある現象を認識する構造の分析に特徴があるのに対し、イギリスの医学史は患者への注目がより顕著であり、患者を医療の中に取り込んで理解することに特徴がある。アメリカの科学史については、ハッキンズの論文『Historical Ontology』が優れている。Ian Hacking, *Historical Ontology* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2002).

- (10) 本論の以下の部分は研究ノートとなり、言及しなければならない文献などは膨大なものになるため、最小限に削り込んだ。医学史と精神医学史の新しい教科書やレファレンスが重要な文献を掲げている。W.F. Bynum and Roy Porter eds., *Companion Encyclopedia of the History of Medicine* (London: Routledge, 1997); Roger Cooter and John V. Pickstone eds., *Companion to Medicine in the Twentieth Century* (London: Routledge, 2003); Mark Jackson ed., *The Oxford Handbook of the History of Medicine* (Oxford: Oxford University Press, 2011); Greg Eghigian ed., *The Routledge History of Madness and Mental Health* (New York: Routledge, 2017).

- (11) 同じ時期のフランスにおけるジョルジュ・カンギレームやミシェル・フーコーなどの重要な役割もようやく英語文献で触れられるようになった。Corinne Doria, "The Right to Write the History: Disputes over the History of Medicine in France – 20th-21st Centuries." *Transversal: International Journal for the Historiography of Science*, 3 (2017): 26-36.

- (12) ドイツの医学史研究の発展とアメリカへの影響については、以下の書物の前半部分がすぐれた説明をしている。Frank Huisman and John Harley Warner eds., *Locating Medical History: The Stories and Their Meanings* (Baltimore, MD:

Johns Hopkins University Press, 2004).

- (13) ヘンリー・ジゲリスト『文明と病気』松藤元訳（東京：岩波書店、一九七三）；アーウィン・アッカークネヒト『パリ、病院医学の誕生：革命暦第三年から二月革命へ』館野之男訳（東京：みすず書房、二〇一三）；オウセイ・テムキン『てんかんの歴史』和田豊治訳（東京：中央洋書出版部、一九八八）。
- (14) もちろん、アメリカにも歴史学出身の大物の医学史家は活躍していた。例えば、『近代医学の発達』を一九三〇年代に著したR・H・シュライオック（Richard Harrison Shryock 1893-1972）は、歴史学の出身で、ホプキンズの医学史研究所の所長までつとめた。R・H・シュライオック『近代医学の発達』大城功訳（東京：平凡社、一九七四）。
- (15) ロンドンのウェルカム医学史研究所と、それがUCLと接合した部分については、WikipediaのWellcome Institute for the History of Medicineの項目が詳しく、有益なリンクを多く含んでいる。https://en.wikipedia.org/wiki/Wellcome\_Institute\_for\_the\_History\_of\_Medicine
- (16) これらの大学の医学史のウェブサイトについては、「医学史と社会の対話」のリンクサイトなどを参照していただきたい。
- (17) 富士川游『日本醫學史』（東京：形成社、一九七二）；川喜田愛郎『近代医学の史的基盤』（東京：岩波書店、一九七七）；『日本医学の発達』（東京：日新医学本社、一九五五）；Jacalyn Duffin, *History of Medicine: A Scandalous Story* (Toronto: Toronto U.P., 1999).
- (18) W. F. Bynum and Roy Porter eds., *Companion Encyclopedia of the History of Medicine* (London: Routledge, 1997) ; Roger Coote and John V. Pickstone eds., *Companion to Medicine in the Twentieth Century* (London: Routledge, 2003) ; Mark Jackson ed., *The Oxford Handbook of the History of Medicine* (Oxford: Oxford University Press, 2011).
- (19) ちなみに、同じ時期の日本では、精神病床の数が一〇倍に増加して三万床から三〇万床になるという真逆の方向の変化が起こされていた。



- (20) 反精神医学については、イギリス、アメリカ、イタリアなどの事例に関して高い水準の研究が数多く発表されている。イギリスに関して利用できる最新の研究は、Oisín Wall, *The British Anti-Psychiatrists: From Institutional Psychiatry to the Counter-Culture, 1960-1971* (London: Routledge, 2018)。フーローに関しては、精神医学の歴史に限って、フランス語圏と英語圏で対応が大きく違い、フランスでは偉大な大家の深い洞察を発展させる方向に、イギリスでは総じて否定的な学術的な「あらまがし」に陥る傾向がある。Colin Jones and Roy Porter eds., *Reassessing Foucault: Power, Medicine and the Body. Studies in the Social History of Medicine* (London: Routledge, 1994) ; Alexandra Bacopoulou-Viau and Aude Fauvel, “The Patient’s Turn Roy Porter and Psychiatry’s Tales, Thirty Years On,” *Medical History* 60, no. 1 (2016) : 1-18.
- (21) 雑誌 *History of Psychiatry* は、‘Research on the History of Psychiatry’として、年に一回のペースで年の最終号に英語の博士論文のタイトルと要旨を発表している。
- (22) Greg Eghigian ed., *The Routledge History of Madness and Mental Health* (New York, NY: Routledge, 2017).
- (23) Richard Alfred Hunter and Ida Macalpine, *Three Hundred Years of Psychiatry, 1535-1860: A History Presented in Selected English Texts* (London: Carlsle Pub., 1982) ; Ida Macalpine and Richard Alfred Hunter, *George III and the Mad-Business* (London: Allen Lane, 1969) ; Richard Alfred Hunter and Ida Macalpine, *Psychiatry for the Poor: 1851 Colney Hatch Asylum—Friern Hospital 1973: A Medical and Social History* (London: Dawsons, 1974).
- (24) G.E. Berrios, *The History of Mental Symptoms: Descriptive Psychopathology since the Nineteenth Century* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996).
- (25) G.E. Berrios and Hugh L. Freeman eds., *150 Years of British Psychiatry, 1841-1991* (London: Gaskell, 1991) ; G.E. Berrios and Hugh L. Freeman, *150 Years of British Psychiatry: The Aftermath* (London: Athlone, 1996).
- (26) Andrew Scull, *Museums of Madness: The Social Organization of Insanity in Nineteenth-Century England* (London: Al-

- len Lane, 1979) ; Andrew Scull ed., *Madhouses, Mad-Doctors, and Madmen : The Social History of Psychiatry in the Victorian Era* (Philadelphia : University of Pennsylvania Press, 1981).
- (27) Andrew Scull, *Madness : A Very Short Introduction* (Oxford : Oxford University Press, 2011) ; Andrew Scull, *Madness in Civilization : The Cultural History of Insanity, from the Bible to Freud, from the Madhouse to Modern Medicine* (London : Thames & Hudson, 2015).
- (28) W.F. Bynum, Roy Porter, and Michael Shepherd eds., *People and Ideas. The Anatomy of Madness : Essays in the History of Psychiatry* (London : Tavistock Publications, 1985) ; W.F. Bynum, Roy Porter, and Michael Shepherd eds., *Institutions and Society. The Anatomy of Madness : Essays in the History of Psychiatry* (London : Tavistock Publications, 1985) ; W.F. Bynum, Roy Porter, and Michael Shepherd eds., *The Asylum and Its Psychiatry. The Anatomy of Madness : Essays in the History of Psychiatry* (London : Routledge, 1988) ; Roy Porter, *Mind-Forge'd Manacles : A History of Madness in England from the Restoration to the Regency* (Cambridge, Mass. : Harvard University Press, 1987).
- (29) Sander Gilman et al., *Hysteria Beyond Freud* (Berkeley : University of California Press, 1993).
- (30) Mark S. Micale and Roy Porter eds., *Discovering the History of Psychiatry* (Oxford University Press, 1994) ; Roy Porter and David Wright, *The Confinement of the Insane : International Perspectives, 1800-1965* (Cambridge : Cambridge University Press, 2003).
- (31) Roy Porter, "The Patient's View : Doing Medical History from Below." *Theory and Society* 14, no. 2 (1985) : 175-98.
- (32) Roy Porter, *Patients and Practitioners : Lay Perceptions of Medicine in Pre-Industrial Society* (Cambridge : Cambridge University Press, 1985) ; Dorothy Porter and Roy Porter, *Patients' Progress : Doctors and Doctoring in Eighteenth-Century England* (Palo Alto, Ca. : Stanford University Press, 1989).
- (33) 最新の研究のまぐめは、二〇一六年の *Medical History* の六〇巻第一号の特集に現れているので、ぜひ参考にす

るとよい。イギリスだけでなく、ドイツや中国を含めた合計六本の論文が、患者の歴史の問題の広がりを多様な形で議論している。

(34) このような「患者の歴史」という語を原理主義的に利用する仕方と、そのようなものとして対立があらかじめ作り出される原理主義的な枠組みは、おそらく現在の日本でも存在している。

(35) James Davison Hunter and Alan Wolfe, *Is There a Culture War?: A Dialogue on Values and American Public Life*. *Pew Forum Dialogues on Religion and Public Life* (Washington, D.C.: Pew Research Center: Brookings Institution Press, 2006).

(36) David Wright, “Getting out of the Asylum: Understanding the Confinement of the Insane in the Nineteenth Century.” *Social History of Medicine* 10, no. 1 (1997): 137-55; Joseph Melting and Bill Forsythe, *The Politics of Madness: The State, Insanity and Society in England, 1845-1914* (London: Routledge, 2006); Akihito Suzuki, *Madness at Home: The Psychiatrist, the Patient, and the Family in England, 1820-1860* (Berkeley: University of California Press, 2006).

(37) Michael MacDonald, *Mystical Bedlam: Madness, Anxiety and Healing in Seventeenth Century England* (Cambridge: Cambridge: Cambridge University Press, 1981).

(38) Michael MacDonald and Terence R. Murphy, *Sleepless Souls: Suicide in Early Modern England* (Oxford: Oxford University Press, 1990); Lauren Kassell, *Medicine and Magic in Elizabethan London: Simon Forman, Astrologer, Alchemist, and Physician* (Oxford: Clarendon Press, 2005).

(39) 現在では、この症例誌は、もう一人の占星術的な医師サイモン・フォアマン (Simon Forman, 1556-1611) の症例録とともに、ケンブリッジ大学のウェブサイトにアップロードされている。二〇一七年二月現在での症例の登録数は約五万件であり、完成のおりには八万件の症例が画像でアップロードされる予定であるとのこと。 <http://www.magicalnmedicine.hps.cam.ac.uk/>

- (40) Anne Digby, *Madness, Morality, and Medicine: A Study of the York Retreat, 1796-1914* (Cambridge: Cambridge University Press, 1985).
- (41) 精神医療と音楽のアウトリーチで言うと、ロンドン大学・ゴールドスミスの松本直美が活発な活動をしており、二〇一七年の七月にはロンドンで精神医学史と患者の狂気の表現を取り扱ったコンファレンスを行い、九月には東京の松沢病院で精神医療と音楽の講演と演奏をまとめている。後者については「医学史と社会の対話」で、宗教学者であり、詩人で文芸評論家でもある中西恭子が記事を寄稿している。<https://www.gold.ac.uk/calendar/?id=10778>